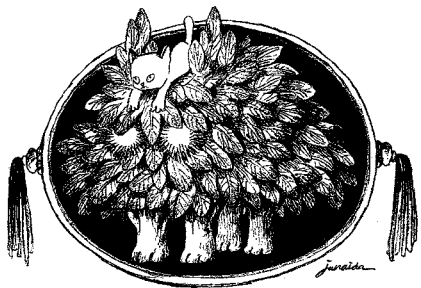


朝日 歌壇 俳壇



「日曜日のブローチ 06」 junaida

短歌時評 生を反転させる言葉

山崎 聡子

今年には四十八歳で亡くなった歌人・永井陽子の没後二十五年にあたる。ひまはりのアンダルシアはとほけれどとほけれどアンダルシアのひまはり音楽的な韻律と物語性を湛えた作風で愛読されてきた永井の歌だが、近年では歌集の入手が困難となっていた。今年に入り、文庫版『永井陽子歌集』、同『L』(石川美南編)が発行されたことはファンにとつて朗報といえるだろう。四月、大宮図書館での企画展と併せて、公園の指定席にて春惜しむ

亡き人の年齢数なる桜かな
(東京都足立区) 金指 孝造

種袋振りて目覚めの時知らず
(羽咋市) 北野みや子

大樺街一軒の芽吹きかな
(さいたま市) 齊藤 真人

土筆つむ畑仕事の鍬は置き
(川崎市) 吉田 泰子

鶯の啼く絶妙の間合かな
(島根県邑南町) 椿 博行

幼子の土筆摘みては振り返る
(尼崎市) 田中 節夫

花は葉に人の心も移りゆく
(相模原市) はやし 央

喜寿祝ふ饅頭二つ新茶かな
(伊丹市) 保理江順子

儚さを刻む遊女の墓碑おぼろ
(長岡京市) 寺嶋 三郎

(兵庫東太子町) 一寸木詩郷

的な作家だった。そして、江戸が指摘したように、「表現と人生を切り分けた」という意識が高まるなか、実人生と短歌表現の距離をどこに定めるかはますます切実な問題として問われている。ツルのうたツルのかたへに歌ひたしこの世を棄ててゆくもののため死にゆく親を詠んだ歌でも、「私」から距離をとることで、普遍的な人間の哀しみ立ち上る。永井の歌が同時代性をもつて読み継がれる背景には、ときに苦しみを伴う「私の生を言葉によつて反転させる力」をみるからであり、歌集復刊は時代の要請ともいえるだろう。(歌)

風信

高山れおな句集「百題稽古」 第5句集。300句を収録。歌人2人の解説や架空の著者インタビュー「霧中間答」などを収めた集付。『鏡花幻稿紅玉と葛藤』短歌は愚痴俳句は馬鹿や脚端然ゆ(現代短歌社・3300円) 第16回田中裕明賞 ふらんす堂主催。東京都文京区の藤井あかりさん(45)の句集「メソティント」(ふらんす堂)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(選考は後日)。

小林 貴子 選

この人の前では素直すみれ草
(さいたま市) 齋藤 紀子

一人でも生きよとエール吹流し
(京都市) 田井 伸子

シーソーは二人でふらこは一人
(岡山市) 橋本 幹夫

毒虫になりたくはなき朝寝かな
(京田辺市) 加藤 草児

吉里吉里忌ひようたん島にドン・ガバチョ
(市川市) 福田 肇

春満月家出するにはもつてこい
(我孫子市) 藤崎 幸恵

聞くところ海風も囁くするそな
(南房総市) 山根 徳一

雨有情風も有情と虚子忌かな
(高松市) 信里由美子

少年の心の形しやばん玉
(伊勢原市) 合志伊和雄

藝妓主仲間とならば頑張れる
(横須賀市) 前田あさ子

【評】一句目、対面者を素直にさせてしまう人は、きっとすみれのような人。二句目、鯉蔵の上でなびく吹流しも、孤高の存在か。三句目、遊具にもいろいろあって楽しいが、ぶらんこには中国由来の歴史あり。四句目はカフカの小説「変身」。

長谷川 權 選

火達磨で生まれし地球焼栄螺
(松山市) 宍野 宏治

鳩居堂はや夏の絵の筆箋
(藤沢市) 西 智

カステラの箱の蝙蝠春月夜
(枚方市) 成定 紋子

大野焼空は灰燼降らし初む
(東京都足立区) 木幡 忠文

どことなく傷むわが家や春愁の
(山梨県市川三郷町) 笠井 彰

この国の減りゆく子供しやばん玉
(日進市) 松山 眞

鯉蔵午後には取れし曇み鏡
(青梅市) 市川 薫舟

わが骨を見知らぬ春が拾ひけり
(横浜市) 三玉 一郎

春愁やブーチンがゐてトランプも
(柏市) 小畑 昌司

行く春や吾も一緒に連れて行け
(筑紫野市) 二宮 正博

【評】一席。地球誕生の場面に思いをはせる。栄螺の燦然を前に。二席。夏の到来にハッと気づく。涼しげな図柄なのだ。三席。店の名を記した蝙蝠の紋。南蛮時代の夕暮れのような。十句目。変な世の中にウンザリ。今の日本の気分か。

大串 章 選

公園の指定席にて春惜しむ
(東京都足立区) 金指 孝造

亡き人の年齢数なる桜かな
(羽咋市) 北野みや子

種袋振りて目覚めの時知らず
(さいたま市) 齊藤 真人

大樺街一軒の芽吹きかな
(川崎市) 吉田 泰子

土筆つむ畑仕事の鍬は置き
(島根県邑南町) 椿 博行

鶯の啼く絶妙の間合かな
(尼崎市) 田中 節夫

幼子の土筆摘みては振り返る
(相模原市) はやし 央

花は葉に人の心も移りゆく
(伊丹市) 保理江順子

喜寿祝ふ饅頭二つ新茶かな
(長岡京市) 寺嶋 三郎

儚さを刻む遊女の墓碑おぼろ
(兵庫東太子町) 一寸木詩郷

【評】第1句。「指定席」とは善くぞ言ったり。長年馴れ親しんだ公園であろう。第2句。あの人が生きていたら今何歳だろう。桜を見ながら染み染み「亡き人」を偲ぶ。第3句。いよいよ出番だよー。種袋を振って種を取り出し畑に蒔く。

高山れおな 選

幼子のことばを拾ふ子猫の目
(伊丹市) 保理江順子

春愁やすべてデフォルメして眺む
(行方市) 前野平八郎

春風や服を着替へたやうな町
(寝屋川市) 今西 富幸

春の旅だんだん欠くる悪友や
(岩見沢市) 村岸 基量

新じゃがや茹でずうと串通る
(横浜市) 坪田 光世

霞みたり航路開ちたる離れ島
(東京都足立区) 望月 清彦

群れてゐてなほも淋しき藝坊主
(八王子市) 長尾 博

凍蛙温めなほす鍋のもの
(大阪府島本町) 芹澤 由美

亀が鳴く声忍ばせて吾も泣く
(野田市) 塩崎えり子

だかれたくて抱かれぬ子猫の田舎かな
(川崎市) 塩谷 我呼

【評】保理江さん。いたいけな者同士の喃語と眼差しでする交感。前野さん。春愁もいろいろ。これはむしろ怒りの気分さえはらんでいるような。この詠み方自体の奇矯なデフォルメ感も面白い。今西さん。素朴で率直な比喩に好感。深まる春。